



高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”“いわて平泉を支える、魅力溢れる”こしえるびと“のメッセージをシリーズで紹介していく。

生産者、地域の一員として歩む

室根町矢越
畠山 貴一 さん



就農のきっかけ

初夏の日差しがまぶしい6月上旬。ピーマンの順調な生育に後れを取らないよう、作業を急ぐ貴一さん。4月に定植したピーマンの実が大きく膨らみ、就農して初めての出荷が始まった。

貴一さんが就農したのは2018年3月。まだ駆け出しだが、やるべきことをきちんとやっていたら、時間は自由に使えるところ、自分で考えているところが農業のいいところだと思っている。仕事の傍ら、以前から自宅の畑や近所のリンゴ農家で作業を手伝っていたこともあり、就農への抵



抗や迷いは全くなかった。「自分には農業が合っているかもしれない」。栽培品目には、好きな野菜のピーマンを選び、母の愛子さんと2人、作業に汗を流す。

仲間の存在

就農を決めた要因の一つが、地元の仲間の存在だった。室根には農業を営んでいる同世代が多く、ことあるごとに集まり交

流するなど仲がいい。「みんなとの会話には学びが多い」。同じ志を持つ同世代の言葉は励みになるだけでなく、良い刺激となっている。

世代を超えた地域の人たちにも支えられている。栽培に必要なハウスの骨組みは全て、葉タバコや小菊の栽培を引退した地域の人に声を掛け、譲ってもらった。話を聞きつけた別の人が連絡をくれたこともある。「みんなが気に掛けてくれる、本当に良い地域。ここだから、自分はやっていける」と感謝している。

規模拡大を視野に

貴一さんはJAピーマン部会や青年部の活動にも積極的に参加している。部会の指導会には欠かさ

ず足を運び、学んだことを実践するのはもちろん、困った時や分からないことがあればその都度JA担当者などに問い合わせ、確認しながら作業をする。

「今は、栽培技術を身に付け、何が起きても自分で対応できるように自己研鑽けんさんに励むとき」。目標は、5年をめどに栽培面積を拡大し所得を確保すること。生産基盤を確立し、「いつの日か軽トラックに一度に積みきれないほどの生産量を上げた」と目を輝かせる。

——「ピーマンがとにかくかわいい。気が付くと自然に話しかけている自分がいる」。ピーマンの成長に負けぬよう、貴一さんも一歩ずつ歩みを進める。



PROFILE

畠山 貴一さん (32)

Kiichi Hatakeyama

室根町矢越

1985年一関市室根町生まれ。2004年に一関学院高を卒業後、盛岡グランドホテルなどで接客業を経験。2018年3月に就農し、ピーマン14畝、その他の野菜16畝を季節を通して栽培。祖母、両親、妻の5人暮らし。



私の一品

軽トラックの幌

自分で取り付けられた幌。油圧ダンパーで開閉が容易にでき出荷や資材の運搬などに大活躍。幌の緑色は大好きな“ピーマンカラー”。あまり無い色なので、目立ちます。